

説教 『 新しき歌を主に向かいて歌え 』

小河信一 牧師

詩編96編 1節～13節

2014年5月18日、復活節第5主日は、或る教会暦において、「カンターテの主日」と呼ばれています。カンターテとはラテン語で、「歌え」という意味です。偶然ですが、毎月の詩編の講解説教として、本日は、詩編96を取り上げました。その説教題が「新しき歌を主に向かいて歌え」です。

昨今、世の中では、人の心を引きつける短いフレーズ（句）がもてはやされています。その点では、詩編こそ、私たちの魂を揺さ振り、励まし慰めるフレーズの宝庫と言えるでしょう。詩編96冒頭の句「新しき歌を主に向かいて歌え」は、その典型です。

この短いフレーズの中に、古いものから新しいものへ、嘆きうめきから賛美の歌へ、そして、世の暗闇から主の栄光へ、という豊かなメッセージが込められています。

それでは、あなたがたへの呼びかけである「新しき歌を主に向かいて歌え」を、私たちの教会また私たち一人ひとりへの誘い^{いざな}としてしっかりと受け止められるよう、詩編96全体に耳を傾けましょう。

詩編96:1-2――

1 新しい歌を主に向かって歌え。

全地よ、主に向かって歌え。

2 主に向かって歌い、御名をたたえよ。

日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。

新しい歌は「日から日へ」、すなわち、主日の礼拝から始まって、日々の生活の中で歌い継がれていきます。私たちはともすれば、古い自分、その古く固い^{かた}考え方・習慣・経験などに寄り頼もうとしますが、新しい歌はそのような自分の中に新しい息吹を吹き込みます。

そして、「御救いの良い知らせを」には、新しい歌の内容が何であるか、表明されています。すなわち、私たちは、神が、罪と死の縄目^{かた}にがんじがらめになっていた私たちを解き放ってくださった救いの御業を告げ知らせるのだということです。

父なる神は、私たちの目がまっすぐに向けられるように、「救い」、イエス（これは「ヨシュア」〔ヤーウェは救いである〕のギリシャ語音訳）という名を持つお方によって、すでに預言されていた「救い」を成し遂げてくださいました。

この詩編はじめ、代々に歌い継がれていた「御救いの良い知らせ」は、主イエス・キリストの十字架と復活によって実現しました。今私たちが歌う讃美歌の中心が、「十字架と復活」に置かれていることは、この詩人の「救いを告げよ」との命令に添うものです。

その点で、詩編詩人が強調した「歌え」(Sing)と相並んでいる3節「語り伝えよ」(Declare)や10節「ふれて言え」(Say)は、新しい歌においては、救いの御業である「十字架と復活」の言葉が重んじられることを伝達しています。

そのような新しい歌は、天の御使いの賛美のように(参照：ルカ2:13-14)、調べと言葉が調和しています。それがこだますると、「諸国の民よ、こそって」(詩編96:7)と言う通りに、天から地へ、地から地へと賛美の輪が広がっていきます。

詩編96はそれ自体が、靈感に満ちた「新しい歌」ですが、冒頭のフレーズに呼応する形で、最後にまた傾聴すべきフレーズが出てきます。

詩編96:13——

主を迎えて。

主は来られる、地を裁くために来られる。

主は世界を正しく裁き

真実をもって諸国の民を裁かれる。

この最終節は、「主を迎えて」に先導されて、「なぜなら(主は)来られるから。なぜなら(主は)来られるから」(逐語訳)と復唱しています。参考までに言えば、主の来臨あるいは再臨への待望が最終章を飾っている新約の文書には、コリントの信徒への手紙(16:22)やヨハネの黙示録(22:20)があります。

「新しい歌」は最後に最高潮が来ます。譬えるなら、最後に、最も良いぶどう酒がふるまわれる婚宴のようだと言えましょうか(参照：ヨハネ2:1-11)。確かに、最後が盛り上がりないと、気が抜けてしまいますね。

しかも、詩編96の歌は、「新しき歌を主に向かって歌え」「なぜなら、主は来られるから」と、意味上、初めと終わりとのフレーズがつながっています。

今日せっかく「新しい歌」をつくったから、明日も同じ歌でいこう、というわけではありません。「日から日へ」、真に新しい、生き生きとした歌を主に向かって捧げるのです。「なぜなら、主は来られるから」。主にあって、闇の中での忍耐が、そしてまた、栄光への希望が備えられているから、歌うのです。

この詩編96の「主は来られる」という預言の言葉は、地に降って来られた主イエス・キ

リストによって成就しました。それによって、主に向かって詩編96を賛美した人々の抱いていた希望がかなえられました。

今私たちは、主イエスが私たちの間に宿られて、私たちの罪を贖ってくださったことを信じています。主イエスは、私たちの信仰が保たれるように、助け主なる聖霊を遣わしてくださいました。その中で私たちは、再び「主は来られる」という終わりの時を目指して歩んでいます。

詩編96の御言葉は、「新しき歌を主に向かいて歌え」「なぜなら、主は再び来られるから」と更新されました。信仰の先達からバトンを受けた私たちは、最後の時、すなわち、主と再会する最高潮を望み見て、日から日へ新しい歌を捧げる時を過ごしています。

使徒信条——

(主イエス・キリストは)

かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。

詩編詩人が「(主は) 眞実をもって諸国の民を裁かれる」(96:13)と預言した通り、終わりの時、裁き主、キリストは眞実をもって立たれます。主イエス・キリストは義しく私たちを裁かれると同時に、眞実の愛をもって私たちを弁護してくださいます。最後の拠り所は、私たちの思いや行いではなく、キリストの〈眞実〉〈確かさ〉〈アーメン / 然り〉に在ります。

私たちは、自分の欲望や名声のうごめく古巣へ引き戻そうとする誘惑に囲まれています。また、私たちは時に、自分こそ斬新な企画が立てられるという高ぶりに駆り立てられることがあります。省みればそこでは、自分が「私の新しさ」と「あなたの新しさ」に優劣をつける審判者になっていることがあります。確かに、私たちには待たねばならない時がありますが、性急な「私の審判」ではなく、聖霊のとりなしを祈り求めたいものです。

日々、私たちがまことの新しさに生き続けられるようにするには、ヘブライ人への手紙の著者は、「改革の時」(ヘブライ 9:10)が重要であると教えています。一口で言えば、主イエス・キリストの十字架を回復すること、つまり、主イエスの血が流され、罪の贖いとなされた救いの御業に立ち返り、私たちが感謝と賛美(まさに新しい歌)をもって罪の赦しを受け止めることであると説き明かしました(ヘブライ 9:11-22)。

使徒パウロの説いた「新しい創造」「新しいもの」と「新しい歌」とは共鳴していません。

コリントの信徒への手紙 Ⅱ 5:17——

だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、（見よ / さあ！）新しいものが生じた。

「キリストと結ばれる」ということは、私たちが生きるにしても死ぬにしても、最も重要なことです。主イエス・キリストは、ご自身が十字架で犠牲になることにより、父なる神と放蕩息子である私とを和解させてくださいました。そこで、神との関係が修復されました。

私たちはもはや、罪と死を恐れることなく、ただひたすらキリストに生かされて生活しています。今度は、和解の輪が隣人関係へと及んでいます。

私たちが礼拝の恵みを受けて、「新しく創造された者」であり続けるならば、以前から愛唱している讃美歌も、また、新しく作詞作曲された讃美歌も、「新しい歌」として喜び（詩編 96:11,12）をもって口ずさむことができるでしょう。

「見よ、ここにも、あそこにも、新しいものが！」——信仰者の生活には、突然の叫び、突然の賛美が絶えることはありません。